

総合的な学習の時間

身近な地域の中から自ら課題を見だし、
仲間と協働し、その解決のための
方策を探る。

探究的な見方や考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通し、よりよく課題を解決していく。そして自分自身の生き方を考えていくための様々な資質・能力を育むことを目標とした総合的な学習の時間。

今回の実践では、地域の実情やこれからの未来を考える活動を通して、自らの将来と地域の在り方について考える実践を進めてきました。



県中教研 総合的な学習の時間部 全県部長
新潟市立岩室中学校

校長 小塚 忠昭

総合的な学習の時間で育みたい資質・能力

総合的な学習の時間において各学校で育みたい資質・能力は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に基づき、各校で独自に設定します。

そこでは、地域の特性や生徒の実態、学校の教育方針などに基づき、目標や内容、育成方針を定めていきます。また、こういった資質・能力を育成、具現化していくためにそれぞれの地域や各校の特色を生かした探求課題を設定していきます。

今年度は両中学校共に「地域活性」をテーマに学習を進めています。

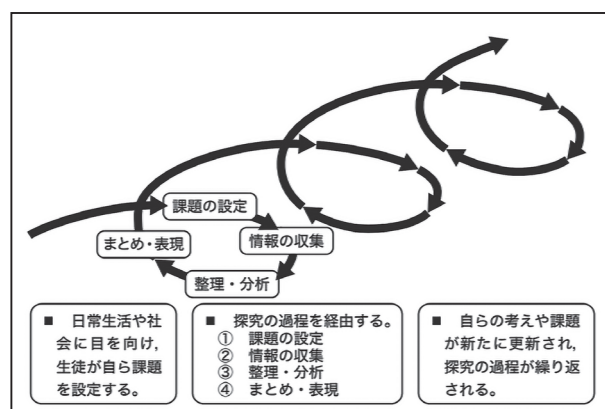
その学習を進める過程において「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」といった探究のプロセスを繰り返すことに加え、振り返りを丁寧に行うことで、生徒自らが成長を自覚することができるような手立てを講じています。

地域の方々との交流や、地域の方々から評

価をもらうことで、生徒たちは、自分が学習を通してどのような力が身に付いたか、何ができるようになったかといった成長を自覚し、さらに、次に挑戦したいことを考えることができます。

そして、これらの学びを生徒自身の生き方につなげるために、「探究活動をして終わり」ではなく、自分事とし、自分の価値観や将来の行動に結び付ける学びを組織していくことも大切だと考えます。

探究における生徒の学習の姿



生徒がどのように自分事として考えられるようにしていくか。 どのようにして当事者意識を高めていくか。

長岡市立寺泊中学校の実践では、「ふるさと寺泊」の魅力や、現在抱えている課題に気付き、そこから自ら問いを見だし、地域の未来や発展を考える活動を中心に取り組んできました。

地域の現状をより深く知るための、フィールドワーク、地域の方の生の声を聞く調査活動を行うことで、生徒自らの五感を生かした活動が学びの起点となっています。

さらに特徴的な活動としては、全校縦割りで活動を行っている点です。学びの継続性だけでなく、他学年と成果の集約を行う場面があり、そこに向けて、各自が責任感や主体性をもって活動に取り組めるといった相乗効果も見ることができています。1年目の実践から、より深い学びにつなげるため、またより

当事者意識を高めるためには、実際に地域の活動への参加や行政との連携の重要性といった提案も挙げられています。

胎内市立築地中学校の実践では地域の現状と課題を丁寧に調査し、学習を進めています。課題設定の場面では、地域で働く人の思いや、地域のよさを共有した上で、人口減少の現状を示し、生徒が抱く地域への肯定的な思いと、現実とのずれやギャップに気付かせることで課題意識を高めてきました。このずれやギャップが起点となり、自分たちにできることを生徒目線で提案していきます。

また、活動を単発で終わらせず、振り返りを含めた活動を繰り返し行い、その過程から新たな問いを生み出すことができ、課題意識がより自分事として捉えられていきます。

自分事から、自分自身の生き方につなげていくために。

総合的な学習の時間は、単に正解を見つけたり、課題を解決したり力を育てるだけでなく、探究を通して自分自身を見つめ、他者や社会との関わりを考え、よりよい人生や社会を主体的に創っていかこうとする姿勢を育むことにも大きな意義があります。さらに、自分事として捉え、当事者意識をもち、その学びをこれからどう生かすかを考え続ける力を育てることが必要になってきます。

そのためには、地域教育コーディネーターやCSをはじめとした地域社会との連携、協

力を得ながら学習を進めていくことで、共にこれからの地域社会について考えていけるはずです。

【自分事として考えていくために】

1. 目の前の課題と自分とのつながりを考えてみる。
2. 多様な生き方に触れる、交流する。
共に考える。
3. 社会や地域への参画を経験する。
共に活動する。
4. 振り返りを通して自分の成長を自覚する
5. 今の自分に何ができるかを考える。
6. 少しでもできそうなことを行動に移す。
たとえ今はできなくとも、思いをもち続ける。

総合的な学習の時間 重点方針

学習過程と評価を中核に、主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導を推進する。

- 学習過程において、「課題設定」を工夫し、「協働的な学習」と「言語活動」を適切に位置付けることを通して、探究的な学習の充実を図る。
- 「育てようとする資質や能力及び態度」の視点に配慮した評価の観点を定め、それに基づいて生徒の具体的な学習状況を想定した評価規準を設定し、学習評価の充実を図る。

総合的な学習の時間 <中越地区／長岡市・三島郡中教研>

11月24日(火) 研究会開催

研究主題：『「深い学びの技法」を基に、未来の地域発展を考える総合的な学習の時間』

単 元 名：「寺泊の魅力アップ大作戦」

会 場 校：長岡市立寺泊中学校

公 開：全学級

授 業 者：庭山 巧夢

指 導 者：長岡市教育センター 指導主事 山田 真弘 様



研究推進責任者
長岡市立越路中学校
丸山 英将



教科・領域担当者
長岡市立寺泊中学校
庭山 巧夢

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

生徒が「ふるさと寺泊」の魅力や現状の課題と向き合い、調べ学習や校外学習を通して、未来の地域発展をより深く考え続ける姿を目指します。自ら問いを見だし、探究的な課題設定・解決場面に主体的・協働的に取り組むとともに、地域の方の声を取り入れ、より現実的な提案を行うことが生徒の深い学びにつながると考えます。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

調べ学習や地域での取組を知る活動を通して、未来の地域発展に焦点を当て、学習課題を設定する。

これにより、生徒は寺泊の魅力や課題に気づき、当事者意識をもって学習課題を設定できるようになります。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.5）

魅力発信・課題解決のための計画書を基に、実体験を伴う活動を組織する。

これにより、生徒は計画と検証結果を比較することができ、新たな課題を見いだすことができるようになります。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

生徒の再考案に地域の方の助言や視点を掛け合わせ、よりよい方策へと練り上げる。

これにより、生徒は地域の方からの問いかけや助言を契機として思考が揺さぶられ、仲間とともに議論を重ねることで、自分たちの提案をより本質的な課題解決へと深めていくようになります。

単元（題材）の様子

下学年時での地域の体験学習や地域の方の講話を通して寺泊の現状に気付かせ、その魅力や課題を自分事として捉えさせます。

これにより、生徒は自分たちができることを思い描き、主体的に学習課題を設定できるようになります。

ポイント1



追究したいテーマを基に縦割り班を組織し、下学年時の地域学習で得た情報を基に、魅力発信・課題解決のための計画書を作成させます。同時に実践に必要な事前準備や手立てを考察させます。

これにより、自ら社会に関わり参画しようとする心を育むことができます。さらに、自分たちの計画・実践を振り返ることで、「自分たちの取組は寺泊の魅力アップにつながっているか?」「地域の生の声が必要ではないか?」など、協働的な学びから新たな課題を見いだすことができると考えます。

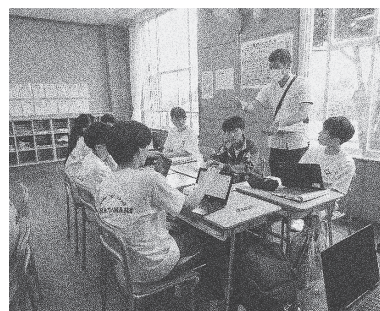
ポイント2



実践後、評価・検証のための1次アンケート（感想や要望）を地域の方に配付し、自分たちの振り返りと地域ニーズを合わせた整理・分析を行わせます。計画書の再構築に向け、十分なデータが得られない班は、追加の調査視点を盛り込んだ2次アンケートを独自に作成・実施させることで、探究に対する主体性を高めます。さらに、寺泊コミュニティー推進委員会や地域おこし協力隊等の助言を取り入れつつ、班長（ファシリテーター）を中心に「①実践」「②成果・課題」「③来年への提言」を1枚の模造紙に集約させます。分析データや地域の方の助言を随時追記して思考の変容を視覚化することで、班内での共有と練り上げが円滑になります。

このように、探究のサイクルを複数回回し、思考の過程（変容）を共有・可視化することで構想の質が高まり、地域との持続可能な関わりを見据えた「深い学び」に到達できると考えます。

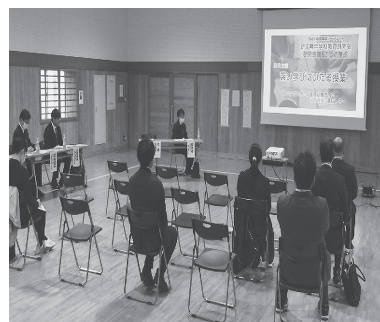
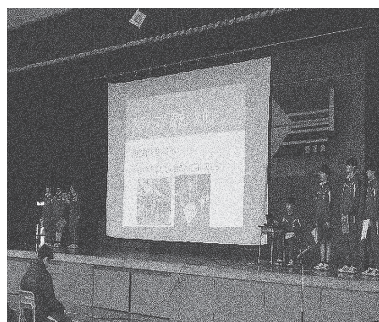
ポイント3



研究会

当日は、生徒の再考案を、地域の方とともに練り上げる授業を予定しています。対話を通して、よりよい方策を考える生徒の様子をご覧ください。

ポイント1・2・3



総合的な学習の時間 <下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研>

10月27日(火) 研究会開催

研究主題：探究の学習過程の質を高める授業づくり
～地域のよさを再確認し自分事として
未来を構想する学びを通して～

単 元 名：「3年：築地地区活性化プロジェクト」

会 場 校：胎内市立築地中学校

公 開：3学年

授 業 者：鈴木 碧

指 導 者：胎内市教育委員会 学校教育課

管理指導主事 池田 裕之 様



研究推進責任者
胎内市立乙中学校

佐藤 義美



教科・領域担当者
胎内市立築地中学校

鈴木 碧

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

生徒が自らの問いを起点に学習を進め、課題解決的な学習活動の発展的な循環を通して物事の本質に迫る探究的な学びができるように「学習過程の質を高める」工夫をしていきます。そのために、学習過程の「課題設定」「情報収集」「整理分析」「まとめ表現」を生徒自身が主体的に、かつ自律的に回し続ける状態へと高め、一つのプロセスで得た気付きや疑問が次のプロセスへの内発的な動機となり、地域活性化のために「もっとやりたい」「もっと解決したい」という生徒の姿を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1・2）

地域の「よさ・可能性」と「問題状況」との「ずれ（ギャップ）」に出会わせ、課題意識を高める活動を行う。

これにより、生徒は「もっとやりたい」「解決したい」という切実感や解決の必要感が生まれることになります。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.12）

地域活性化の実践を複数回行い、「実践と振り返りの行き戻り」のプロセスを仕組む。

これにより、生徒は実践から、改善点を振り返ることができ、さらに次の実践へつなげることができます。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.20）

「単元を貫く視点」（地域のよさの再確認、地域活性化、未来の構想）の問いで振り返りを行う。

これにより、生徒は振り返りから「次時は何を追究するのか」という新たな問いをもつことができます。

単元（題材）の様子

生徒だけで地域活性化について話し合い活動を行った後に、実際に地域活性化に尽力する方々の「思いや願い」を聞き、その生き方への「あこがれ」や「尊敬」を高める場面を設定します。その上で、生徒に地域の問題状況という「現実」に出会うようにします。このように一度高まり安定した生徒の思いを「ゆさぶる」働き掛けにより、「生徒の願いと現実とのギャップ」を自覚させ、「もっとやってみたい」「解決してみたい」という切実感や解決の必要感が生まれ、課題意識を高め、探究の学習過程を自走させる原動力につなげることになります。

地域の課題を見だし、生徒同士で共同しながら解決策を構想、実践していく力を育てます。

ポイント1

生徒が自ら考えた地域活性化のための実践を複数回実践できる単元構成にし、「実践と振り返りの行き戻り」のプロセスを組んでいきます。生徒が1回の実践で描くアイディアは、多様で広がりがあるものの、拡散していたり見通しが不十分であったりすることがあります。そこで実践を複数回行うことで、その都度実践を振り返り改善点を考え、次の実践へつなぐことができます。

生徒の課題意識がより「自分事」として捉えることにつながり、知識を更新し、概念知識を獲得することができます。

地域活性化のために「やってみたい」「解決したい」という思いを、単元全体を通して持続・発展させるため、1単位時間及び、1単元の終末に、「単元を貫く視点」(地域のよさの再確認、地域活性化、未来の構想)に迫る問いで振り返りをを行います。

毎時間の振り返りを単元全体のゴールと結び付けることで、「今日明らかになったことから、次時は何を追究するのか」という新たな問いを生み出すことができ、自分自身の学びを自覚（メタ認知）する力を育むことができます。



ポイント2

今回の活動は地域活性化のために有効だったと思いますか？*					
1	2	3	4	5	
いいえ	☐	☐	☐	☐	はい
今後も地域に貢献したいと思いますか？*					
1	2	3	4	5	
いいえ	☐	☐	☐	☐	はい
竹灯籠に添える活動を通して、考えたことや感じたこと、気付いたことや今後の生活で活かしたいことを記入しましょう。					
自由記述欄					

ポイント3

研究会

研究会当日は、地域活性化のための最後の実践へとつなげる「整理分析」の学習場面を公開します。生徒は、10月に実践した1回目の「築地カフェ（仮名）」経験から、11月上旬に実践する2回目に向け、実践がよりよいものとなるために、意見の交流をしていきます。

今までの実践から、生徒がより地域活性化のために「自分事」へと深まり、主体的に活動している姿を公開できるようにしたいと思います。

